



Title	ハインツ・アルトシュール口述回想「記憶を刻みながら」②
Author(s)	中村, 綾乃
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 27-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57297
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中村 綾乃（訳）

1. 神戸のドイツ人と「ユダヤ人」－記憶の交差

手塚治虫の漫画作品『アドルフに告ぐ』は、アドルフというファーストネームを持った三人の生涯を軸として物語が展開していく。物語の舞台は、第二次世界大戦下のドイツと日本、終盤は中東戦争下のイスラエルとアラブ諸国となる。三人のアドルフのうちの一人は、ナチス・ドイツの総統ヒトラーである。あとの二人は、ドイツ人の父親と日本人の母親の間に生を受けたアドルフ・カウフマン、神戸の下町でパン屋を営むドイツ人一家の息子のアドルフ・カミルである。カウフマンとカミルの二人は同年齢で、ともに神戸で生まれ育った幼馴染という設定になっている。この物語のはじめの方に、次のようなカウフマン親子の対話が描かれている。カウフマン家は、神戸市街を見下ろす山の手邸宅を構えており、息子のアドルフはドイツ人の子供が通う学校に通っている。神戸のドイツ総領事館に勤める父親は家路につく途中、学校帰りのアドルフに会い、父子はその日あったことを話しながら、肩を並べて帰宅する。それまで上機嫌だった父親は、息子の親友の名前を聞いた途端、にわかに表情が強張っていく。そして「あの子とはつきあうな」と息子を戒める。父親が息子に遊ぶことを禁じた相手は、アドルフ・カミルであった。なぜ幼馴染の親友と遊んではいけないのかと問う息子に対して、父親は「あの子はユダヤ人だ」、「劣等民族なのだ」と言い放つ。アドルフは頑とした父親の態度に怯むが、「ユダヤ人」や「劣等民族」が何を意味しているのかはわからず、無二の親友と会えなくなることを悲しむ¹。

現在、ドイツのフライブルクで暮らすヴォルフガング・ミュラー氏は、このアドルフ少年と同世代で、同じように神戸で生まれ育ち、ドイツ人学校に通っていた²。1934年生まれのミュラー氏は、1947年に家族とともにドイツへ送還されるまでの13年間を神戸で過ごしている。当時の外国人家庭には、「アマ（阿媽）さん」³と呼ばれていた日本人の家政婦がおり、彼女らと過ごす時間が長かった子供たちは、流暢な日本語を話すことができた。子供たちは、両親とは母語、兄弟や家政婦、隣近所の住民とは日本語というように、二つの言語を使い分け、日本語が不得意な両親のために通訳の役を買って出ている。ミュラー氏もそのような子供たちの一人であった。同氏は、日本語とドイツ語という二つの言語、日本とドイツという生活空間の間を行き来してい

¹ 手塚治虫『アドルフに告ぐ』第1巻（講談社、2012年）115頁。

² 神戸ドイツ学院（Deutsche Schule Kobe）は、神戸のドイツ人家庭の子供たちの教育施設として、1909年に設立された。同校の歴史については、以下を参照。Lehmann, Jürgen, *100 Jahre Deutsche Schule Kobe 1909 bis 2009: Eine Chronik als vorläufige Geschichte dieser kleinen deutschen Schule in Japan*, München: Iudicium, 2009.

³ 当時、外国人家庭で働いていた日本人家政婦を指しており、「おばあさん」という意味の台湾語の阿媽という言葉に由来する。

た子供時代を「両生類」に例え、『水陸両性の生活』と題した回想録を上梓した⁴。この回想録には、冒頭の手塚作品の一場面と重なる記憶が綴られている。

ある日のことでした。1942年か1943年のはずです。学校にいと、私たちの共通の友人 ユルゲン・リーセン（やはり私より上のクラス）が声を掛けてきたのです。『今日の午後、芦屋に住んでいるDのところに行くのだけれど、お前も一緒に来ないか。あいつのところ に大きな鉄道模型があるから、一緒に遊ぼう』と言いました。願ってもない誘いでした。 『僕も行く』と即答しました。一緒に阪急電車に乗れば、彼の住む芦屋まで行きたいことが できましたから。家に帰って昼食をとる際、母に行き先を告げておけば、それで万事思い 通りでした。しかしここで、乗り越えようもない壁に直面することになったのです。母は 理由も告げずに彼の家に遊びに行くことを禁じ、断固として譲ろうとはしませんでした。 こんな頑な母を初めて見ました。ユルゲンの誘いを断らなければならず、何とも気まずい 思いをしました。結局、彼一人で出掛けることになりました。Dの電動鉄道模型で遊べな かったこと、このことがずっと頭から離れませんでした。広い絨毯の上に線路が敷かれて いて、そこを電車が走るのをずっと想像していました。（中略）ユルゲンは、それでも D.Aのところ遊びに行っていましたし、私の級友だったH.M.と彼女の両親もよく彼の 家を訪ねていました。ですからD.Aは、いろいろなことにもあったにもかかわらず、何も 気づかなかったのではないのでしょうか。彼の両親は、日々の出来事を息子の目に触れない ようにしていたのですからなおさらでしょう⁵

アドルフ少年と同様、当時のミュラー氏には、なぜ母親がその友達の家へ遊びに行くことを禁 じるのかはわからず、ただ憧れの電動鉄道模型で遊ぶことができないことに憤った。同氏がこの 子供時代の記憶を歴史的枠組みの中で位置づけることができたのは、それから十数年を経てから のことであった。

子供時分、ミュラー氏が遊びに行くことを禁じられた友人宅とは、本稿で取り上げる回想録を 残したハインツ・アルトシュール氏の家であった。この当時、アルトシュール一家は芦屋に住ん でいた。日本本土への空襲が激しくなれば、遅かれ早かれ神戸はその標的になるであろうと予測 し、神戸を離れていたのである。

アルトシュール氏の回想録は、1926年から30年と1933年から終戦後の1946年にアメリカに 渡るまでの日本滞在についての記憶を綴ったものである。この回想録は、アルトシュール氏自身 がオーディオカセットに吹き込んだ口述回想がもととなっており、同氏の息子のディター・アル

⁴ Müller, Wolfgang, *Amphibisches Leben: Aufwachsen in zwei Welten*, Tokyo: OAG-Tokyo, 2009.

⁵ Ebenda, S. 131.

トシュール氏が書き起こし、注釈を付したものである。なおアメリカに移り住んで以来、アルトシュール一家は英語を話すようになり、この回想録でも英語が用いられている。息子の手が加わった回想録は、ニコラ・ヘルヴェック、トーマス・ペーカー、クリスチャン・シュパングによるドイツ語の解説が加わり、上梓された⁶。

本研究プロジェクトの前号では、ヴィンクラー商会の構成員として1926年に来神し、三年半に及ぶ神戸滞在を経て、フィリピンからオーストラリア、ハワイを経由し、アメリカ大陸を横断して故郷ドレスデンに戻った後、結婚し、1934年に再び来神するまでの時期の回想を取り上げた⁷。1930年に故郷のドレスデンに戻り、結婚した同氏は、しばらく父親の事業を手伝っていた。しかし事業は不振続きで、利益が上がる見込みはなかった。さらに同氏は、長年活動に携わってきたボートクラブから退会させられる。不景気と事業不振、政治的圧力によって活動の場が奪われたことで、「暗雲が垂れ込んでいるかのようで、何かよくないことが待ち受けているかのようであった」という⁸。

時代の不穏な空気を感じとったアルトシュール氏は、ドイツを離れる決心をする。同氏がアメリカを経由して、再び神戸の地を踏んだのは1934年7月であった。最初の神戸滞在は単身であったが、二度目は結婚後で妻と幼い息子を伴うこととなった。前号で取り上げた回想では、同じように独身であったドイツ商人との交流、彼らとの旅行に関するものが大半を占めたが、本稿では家族同士の付き合いなども取り上げられている。妻子より一足先に神戸に到着したアルトシュール氏は、自動車の運転免許証の取得に挑んでいる。当時、外国人が日本で車を運転するというのは稀有な例であり、運転免許の試験は難関であったことから、同氏は準備に余念がなく、相当の労力をつぎ込んだようである。無事免許を取得した後、妻子が神戸に到着し、家族三人の新しい生活が始まった。

1938年を節目として、アルトシュール一家の暮らし向きは変わっていく。この年の7月、神戸は集中豪雨とともに大水害に見舞われ、一家も被災した⁹。一家にとって、1938年は被災した年であるとともに、友人や知人との関係が変わり始めた年でもあった。たとえば家族で散歩をしていて親しい友人に会うと、その友人は挨拶を交わすのを避けるようにして、通りの反対側に行ってしまう、足繁く通ったクラブでテーブルの席につくと、相席した面々が一斉に席を立ち、別の

⁶ Herweg, Nikola / Pekar, Thomas / Spang, Christian W. (Hg.), *Heinz Altschul: As I record these memories... "Erinnerungen eines deutschen Kaufmanns in Kobe (1926-29, 1934-46)*, Tokyo: OAG-Tokyo, 2014.

⁷ 中村綾乃 (訳) 「ハインツ・アルトシュールの口述回想『記憶を刻みながら』①」言語文化共同研究プロジェクト2014「言語文化の比較と交流2」27-37頁。

⁸ Herweg, Nikola / Pekar, Thomas / Spang, Christian W. (Hg.), *a. a. O.*, S. 30

⁹ 1938年7月3日から5日かけて阪神地区で発生した水害で、阪神大水害と呼ばれている。神戸市では、河川の決壊と山崩れによる土石流で家屋が浸水、倒壊し、甚大な被害をもたらされた。

テーブルに移動するというような出来事が起こるようになった。友人や知人はアルトシュール一家と距離を置き、一家との交際を絶つようになっていった。かつてアルトシュール氏と同じボートクラブに所属し、ともに練習に励んでいた仲間の一人は、ナチ党の阪神支部を統括する立場に立ち、手のひらを返したように冷たい仕打ちをするようになった。

回想の中で、アルトシュール氏は自らの出自について打ち明けている。同氏の父方の家族と母方の祖父はユダヤ系であった。同氏の両親はユダヤ教の共同体には属したことはなく、子供たちはプロテスタントとして育った。しかしナチ体制下で成立した法律において、ユダヤ人とされる。この法律によれば、アルトシュール氏の妻は「アーリア人」であることからドイツ人として扱われ、息子は「混血ユダヤ人」とされた。戦時中、妻と息子はクラブでドイツ人用の配給を受け取り、「完全なユダヤ人」とされた同氏はこの配給を受けることはできなかった。

中国や日本に支店を置いていたドイツ企業や貿易商は、1939年1月をもってユダヤ人を解雇するよう圧力をかけられていた¹⁰。誰がユダヤ人で、誰がドイツ人かという規定は、1935年9月に成立したニュルンベルク法に拠るものとされた。アルトシュール氏と同じく、ユダヤ人と規定されたために失職したのが、東京のレイボルト商館の構成員であったハインリッヒ・シュタインフェルト氏である。シュタインフェルト氏は、1923年にレイボルト商館の構成員として来京し、その後支配人にまでなったが、1939年2月をもって解雇された。同氏は日本の官憲に対して、一連のユダヤ人に対する差別と排斥について「迷惑至極」という感想を述べている¹¹。

アルトシュール氏やシュタインフェルト氏がそうであるように、ニュルンベルク法によってユダヤ人とされた人々の多くは、ドイツ人クラブや協会の会員で、子供はドイツ人学校に通い、ドイツ人社会の中に身を置いて暮らしてきた。そのような人々がドイツ人社会から排斥され、居場所を失うこととなったのである。

1942年1月、東京のドイツ大使館は、日本に住むユダヤ人に対してドイツ国籍の剥奪の通告し、査証の返納を命じた。1942年の内務省警保局の『外事警察概況』には、日本に在住するドイツ人で、国籍を剥奪された者のリストが掲載されている。この時、国籍を剥奪されたドイツ人は、先のニュルンベルク法によってユダヤ人と規定された者とその配偶者、反ナチ的な言動をとった者であった。このリストには、113名の名前が記されており、アルトシュール氏やシュタインフェルト氏、それぞれの家族の名前もある。なおアルトシュール氏の回想によれば、同氏自身が国籍および市民権を剥奪された後も、「妻と息子はドイツ市民として扱われた」と述べている。しかし日本の官憲の記録によれば、同氏の妻も国籍を剥奪されたドイツ人の中に含まれている¹²。

¹⁰ 内務省警保局『外事警察月報』1939年3月分（不二出版、1994年）40頁。

¹¹ 内務省警保局『外事警察月報』1939年4月分（不二出版、1994年）45頁。

¹² 内務省警保局『外事警察概況 昭和17年』（龍溪書舎、1980年）372-374頁。

アルトシュール氏とミュラー氏、世代と立場が違う二人の当事者の記憶が重なり合い、神戸のドイツ人社会の中の間人間関係が浮かび上がってくる。アルトシュール一家は、ドイツ人社会から疎外されたばかりか、職場を解雇され、国籍および市民権を剥奪された。挨拶をしても無視される、クラブで仲間外れにされる、ある友達の家に行くことを禁じられるなど、一見して些細な日常の出来事や人間関係を取り上げた回想のようであるが、その中にも政治的な圧力が介在していたのである。

次節以降のアルトシュール氏の回想は、1934年に同氏がアメリカ経由で日本へと向かう下りから始まる。同氏は、幼い息子を含む家族三人が住むための新居を神戸の布引に構えた。この布引で暮らした四年間は、公私ともに充実しており、同氏の言葉を借りれば「幸せの絶頂」にあった。しかし前述のように、1938年から一家の生活が暗転していく。阪神大洪水での被災、ドイツ人社会からの疎外、政治的圧力、空襲の不安、食糧物資の不足と生活の困窮などが語られているように、この時期の記憶はナチズムと戦争の影響が影を落としている。

記憶の曖昧さ、話が前後、重複する部分があることは否めないが、そのような語り手自身の記憶の構成もまた分析の対象となりうる。またミュラー氏の回想や日本の官憲の記録のように、別の当事者の記憶や史料と突き合わせることによって、戦時下神戸のドイツ人社会の歴史を紐解くことができるであろう。

2. 二度目の日本滞在（1934年から41年）戦争の影

ニューヨーク滞在は、当初予定していたよりも数日延びることになりました。ニューヨークを発つ前、メリソン氏は私に打ち明けたのです。近いうちに日本へ行き、フックのついたラグマットの市場を開拓するつもりがあることを。社運をかけた商品だとのことでした。それから私は、列車でニューヨークを立ち、西海岸を目指しました。西海岸からホノルルを経由して、1934年7月初旬に神戸に着きました。

(中略)¹³

妻とボブは、9月に到着することになっていたのに、神戸に着いて最初の数ヶ月間、私は一人の時間を持て余していました。なぜ妻子と一緒に日本に来なかったのか、その理由を説明しておきましょう。5月、私がドイツを発った時、息子はまだ生後六ヶ月でした。その息子を連れてアメリカ経由で旅行するとなると、いろいろとストレスを強いられことは目に見えていました。息子同伴の旅行は避けたのです。友人のヘンリー・ヴォーラーと彼の妻が、ハニと息子に同伴して日本まで来てくれることになっていたのです。この夫妻はちょうどドイツに一時帰国して

¹³ テープに吹き込まれた口述回想では、神戸港に出入りしていた外国の客船や街の様子、トアロードにある骨董品店の店主との交流などが語られている。

いて、スエズ運河を経由する船で日本に戻る予定だったのです。この船は、9月の何日かに日本に到着するようになっていました。旅の手筈を整え、段取りを組んでおいて正解でした。かわいそうなことに妻は、船上での四週間、四六時中船酔いに苦しめられ、旅を楽しむどころではありませんでした。彼女が船室で死んだように横たわっている間、同行した友人が赤ん坊である息子の世話を引き受けてくれ、ずいぶんと助かりました。

日本に来て最初の数ヶ月間は、私自身のことのために使う時間がありました。そこで一念発起して日本の運転免許をとることにしたのです。しかしこれは、想像以上の難関でした。地面にロープでコースを作り、この藁のロープに接触することなく、一分四十五秒という指定時間内に走行するというテストがあり、これにパスしなければならなかったのです。四方八方に警察官が立っていて、目を光らせていました。少しでもロープに接触したり、あるいは決められた時間を超過すると、警察官の笛が鳴るのです。この笛が鳴れば、その時点でテストは諦めなければならず、次の試験までしばらくは間を置かなければなりません。数週間後、また来て試験に挑むことになります。テスト当日、どのような走行をしなければならないのか、知る由もありませんでした。私の事務所から数マイル離れたところに空き地があり、いろいろなパターンの走行を試すことができたので、そこへ通い練習をしました。ある時は椅子、またある時はハンマーのような形、また三角など、さまざまな形がありました。レッスン料を払えば、フォード社の故障車を使って練習することもできたのです。私はもちろんのこと、何週間かかけて、事務所での仕事を終えてからレッスンを受けました。それはもう張り切ってこの空き地での練習に臨みました。テストの日が迫ってきた頃には、だいぶ上達したという実感がありました。実際、テストに合格したことで、私は鼻高々でした。しかしこの合格だけでは、道半ばでした。運転技術のテストとは別に、かなりの分量の筆記試験にパスしなければならなかったのです。さらに専門的な質問についても、英語で答えなければなりませんでした。車の各々のパーツなど、もともと何の知識もありませんでしたから、わからないことだらけの問題で苦勞しました。しかし何とか、この筆記試験にも合格しました。現在では、この一連の試験はさほど難しいものではありません。しかしだからこそ、かつての正真正銘の運転免許をとったことは私の自慢の種なのです。この日本の運転免許があったおかげで、1939年に家族連れでアメリカに行った時、あちこちを車で回ることができました。私が持っていた免許証には英語で記載されている箇所はありませんでしたが、ほぼすべての国々でこの免許証が通用することを事前に調べて知っていましたので、アメリカの警察官に呼び止められた時など大喜びしたくらいです。今では試験を受ければ、いともたやすく運転免許を取得できますが。大変な思いをして運転免許を手にした外国人はごく僅かです。その数少ない例に私は入っているのです。そんな運転免許ですから、今でも珍しい、価値ある骨董品のようなもので、大切に保管しています。時々友人にも見せたりするのですが、そんな時はちょっとした歓声が上がります。

あつという間に月日が流れ、ハニと赤ん坊がやってくる日が間近に迫っていました。その間、私は家族で住む家を探していました。私の最初の神戸滞在は三年半にわたりましたが、その時に知り合ったのがズエス夫妻です。夫の方は私と同郷で、ドレスデン出身だったことからすぐに親しくなりました。彼は事業主で、何度か自宅に招かれたことがあります。夫妻の自宅は布引にあって、クラシックな洋館でした。立地といい建物といい、非の打ち所がなく素晴らしかったのです。そこから少し離れたところに、自分たちの家を建てているところだと聞いていたので、この夫妻のところに行き、新居が出来上がって住めるようになったら、今住んでいる家の方を引き継ぎ、私たちが住むことができないか聞いてみました。彼らにとっても悪くない話で、家主は反対する道理はないので、話を持ちかけてみるようにとのことでした。ひとつだけひっかかることがありました。彼らの新居が出来上がるまであと数ヶ月かかるので、布引の家が空いて私たち一家が住めるようになるまでの間、住む家を見つけなければなかったのです。この仮住まいの家もとても気に入っていました。この家は私の事務所から近く、路面電車に乗ってすぐというところがありました。美しい庭があり、すぐ近くには布引寺（訳者：布引山釈尊寺）がありました。閑静な住宅街の中にあり、日本の伝統的な家屋が多く、緑の木々や庭園などもありました。願ってもないくらい理想的な場所にありました。やはりヴィンクラー商会の構成員で、オットー・ベアーという友人がいました。新居に移り住むまでの間、彼は自分が住んでいた家を私たちに貸し出してくれることになったのです。オットー・ベアーは、トアホテルの裏手、神戸ではもっとも標高が高いところに住んでいました。彼の家を訪ねるのは、ちょっとした山登りをするようなものでした。いずれにせよ、素晴らしい家にめぐり合いました。

いよいよハニと息子が到着し、私たちはオットー・ベアーの家に入り、しばらくの間そこに住みました。数ヶ月して、ようやく布引の家に移りました。ここでの暮らしも楽しく、月日が過ぎていきました。近所には、私たちと同じような家がありました。オーバーライン氏はユーラシアンで、父親が日本人、母親がドイツ人でした。私たちは、家族ぐるみで親しくしていて、ともに楽しい毎日を過ごしていたのでした。幼いボブは、庭で三輪車に乗るのが好きでした。私たちは、犬を一匹か二匹、猫も飼っていて、賑やかな毎日でした。また我が家には、腕のいい料理人がいました。最初の数年間、1934年から1938年までの間ですが、布引の家での生活は笑顔に満ち溢れたものでした。この時が幸せの絶頂だったといえるでしょう。

多くの隣人に恵まれました。我が家の裏手には小川谷と呼ばれる小さな谷があり、そこには小川が流れていました。この小川沿いには五軒の家が軒を連ねており、いずれもドイツ人家族が住んでいました。もっとも上手にあったのが、フォーゲルサング一家の邸宅でした。他には、デーリング家とマイン家の邸宅があり、息子を連れて布引寺へ散歩に出掛ける時など、彼らの家の前を通っていたので、きまって顔を合わせていました。この散歩道を上がると、クスノキと松の木

が生え茂る中に美しい寺があり、神戸の街を一望できるのです。喧騒から離れた静かなところで、子供の遊び場所としても最適だったのです。

1938年は節目の年となりました。いろいろなかたちで物事が変わり始めたのです。まず6月から7月にかけての梅雨の時期、大雨が続きました。文字通りの土砂降りの後、山が崩れ落ち、ひどい地滑りが起きたのです。木々はすべて根こそぎになり、小川谷を流れる小川は決壊し、たくさんの岩石や大木が流されていました。朝早く、デーリング氏が私のところにきました。彼の家の近くまで車で連れて行ってほしいとのことでした。デーリング氏は、向こう岸の道路につながる橋が沈み、川に流されてしまったため、彼の妻と娘が家から一歩も出られずにいるという知らせを受けたのです。私たちは、すぐに事務所を出て、布引の我が家の近くの安全なところまで車で行き、車を降りた後、歩いてデーリングの家へ向かいました。何とかして二人で、デーリングの妻と娘を助け出し、私は女の子を背中におぶりました。そうこうしているうちに、道路は水浸しになりました。ひどい洪水が起きていたのです。浸水していない寺へ向かう道の分岐点に着くまで、私は何度も足をとられました。その後迂回路をとりながら、やっとのことで我が家にたどり着いたのです。結局この日、我が家には四、五組の家族がいました。マイン家とデーリング家、フォーゲルサング家の人々です。犬などのペットを連れてきた家族もいたのです。もちろん子供たちも一緒でしたから、しばらくの間、家はキャンプ場のような騒がしさとなりました。我が家は、離れた小高い丘の上に建っていたので安全でした。しかし裏手にあった家々は、日本人（そのうちの一人は歯医者でした）が住んでいた家屋も含めて、次々と崩れ落ちていき、水に流されて跡形もなくなっていくのを目の当たりしました。わずか数時間のうちに神戸の町全体が廃墟となってしまったのです。瓦礫の山ができ、路面電車は倒れて家屋に押し寄せられ、停電となり、路面電車は動かなくなっていました。三宮駅の地下での被害が甚大で、相当数の人々が溺れ死んでしまったのです。水道水の供給が滞ったために、どこへ行ってもボトル入りの水が手に入る場所を探さなければなりません。砂が濡れて泥だらけになり、悪臭を放っていて、どこへ行くにもゴム長靴を履いて歩くというあり様で、誰もが辛酸をなめることになりました。この苦境を乗り切るために、家族を離れたところに避難させるのがベストだという結論に至りました。数日後、マイン家とデーリング家、ハンニと私たちの息子は、何人かの使用人を連れて軽井沢へ向かいました。軽井沢は東京からさほど遠くないところにある避暑地ですが、そこで結構な大きさの一軒家を借りることができたのです。しばらくの間、この三世帯の家族が住むことになりました。一、二ヶ月の間、この三世帯の家族が共同生活をするようになったのです。まあ三世帯も家族が身を寄せ合い、そこに子供たちも加わるのですから、うまくいかないこともありました。快適というわけにはいきませんでした。何とかやっていた。

私たち男性陣はというと、家族の世話から解放されてほっとしていました。何しろすべてが破壊されてしまって、ひどい状況でしたから。何週間も水不足が続き、交通機関も何もかもが麻痺

して、神戸は大災害に見舞われていたのです。加えてひどく蒸し暑かったので、湿気から悪臭が立ちこめていました。なかでも、大量の鼠の死骸は耐え難いものでした。冒険のような毎日で、生涯忘れない出来事となりました。なかでも目に焼きついているのは、神戸の街全体を覆っていた木々です。奇妙なことに、枝はなくなり、樹皮が剥がれてしまい、跡形もなくなってしまったのです。山の木々は、岩や水などによって流され、電柱のような姿になり、神戸の下町の方まで流されていったのです。何もかもが機能するようになるまでには、ずいぶんな時間を要しました。水と電気の供給は少しずつ復旧し、神戸の街全体が元の状態に戻るまでには、数ヶ月の月日がかかったのです。

この年、1938年ですが、洪水のこととは別に何かが変わろうとしていました。日本において、なかでも神戸がそうだったのですが、ナチ党の影響力が強まっていました。ドイツ人クラブにおいても、ナチ党の一味が幅をきかせていたのです。その前触れとして、ある出来事がありました。ドイツ人クラブと神戸クラブ（かつての英国クラブ）の共催で、ボーリングの大会が行われることになったのです。私は、ドイツ人クラブのボーリングチームには所属していませんでしたが、名選手の一人とされていました。しかし私は、チームのメンバーに選ばれなかったのです。その理由を訊ねたところ、大会を運営する委員の一人に熱心なナチ党支持者のブリュッゲルマンという男がいて、彼が私をメンバーから外し、私の大会参加を阻んだということがわかりました。しかし、他のメンバーが総勢で彼に抗議したために、ブリュッゲルマンは譲らざるをえなくなったのです。結局、私は大会に参加することになり、ボーリングをしましたが、ドイツ人クラブが主催する活動に加わるのはこれが最後となりました。大会後、私はクラブへ脱退届を出し、会員資格も永久に失いました。

ここで打ち明けておきましょう。私の父方の家族はユダヤ系です。といっても父自身は、何か信仰を持っているわけではありませんでした。私を含めた三人の息子は、プロテスタントとして育てられました。母方の祖父がユダヤ人ですが、母自身はプロテスタントとして育てられました。しかし、ナチ党政府が公布したニュルンベルク法によれば、私は完全なユダヤ人だったのです。私の妻は、もともとはカトリックだった家族の出でした。妻自身はプロテスタントだったので、彼女はドイツ人に振り分けられました。ドイツ人と見なされていた妻は、人種法による危害が及ぶことはありませんでした。父方の祖父母がユダヤ人とされたため、私の息子は混血ユダヤ人とされました。

神戸では、さまざまな事情が交錯して、複雑な様相を帯びてきたのです。長年親しくしてきた友人が急によそよそしくなり、通りを歩いていて私たち家族に出くわすと、あわてて反対側の通りに行ってしまうようになりました。私たちと立ち話をしようものならば、ナチ党員による制裁措置が加えられることがありました。かつての友人は、その制裁をただただ恐れていたのです。実際、ドイツ人クラブには確信的な信奉者がいましたから。神戸に来たばかりの頃、何年間かボ

ートクラブに所属していました。私たちのコーチはグロンビックという男でした。彼の下で、三年続けて毎夏の練習に励みました。グロンビックと私たちは、和気藹々とやっていました。しかし、彼は神戸のナチ党支部のトップに君臨するようになるやいなや、手のひらを返したように私を無視しました。まだ私がクラブを脱退する前のことでした。クラブのどこかの部屋に私が顔を出すと、彼は奇妙な振る舞いをしたのです。今でもよく覚えている出来事があります。その日、デーリングや仲間の面々とボーリングをした後、ダイニングルームのある階へ上がって行きました。デーリングらは、何気なくグロンビック、その助手役のフェールクルックがいたテーブルの席に着きました。私がダイニングルームに入った時、皆一つのテーブルを囲んでいたのです。そこで私が部屋を一回りして、別のテーブルの席に着いたのではさすがに不自然だろうと思い、仲間と一緒に座りました。私が席に着いて二、三分もしないうちに、グロンビックとフェールクルックが席を立ったのです。デーリング他私の仲間たちは、すぐには状況を呑み込めませんでした。彼らには、思いもよらないことだったのです。この出来事は氷山の一角にすぎませんが、私がクラブからすぐに身を引くきっかけとなりました。しかしクラブを去るだけでは済みませんでした。私はヴィンクラー商会の構成員でしたが、同商会はナチスからの圧力にさらされていて、かねてより面倒な問題を抱え込むことになっていました。私を解雇するなど、何がしかの措置をとるよという圧力があつたのです。

ちょうどこの頃、私はアメリカ領事館へ行き、私と家族分の割当移民の申請をしました。私の名前はこの割当移民の名簿に載り、何度か領事館に呼ばれ、面接を受けました。しかし後からわかったことですが、いくら待ってもこの領事館から申請したところで、私たちに割当移民の順番がまわってくることはなかったのです。妻がドイツ領事館に呼び出されたのも同じ時期です。領事館側は、彼女自身と息子のためにも、私と離婚するよう彼女を説き伏せようとしたのです。もちろん彼女は、断固として拒否しました。この時期、このような厄介な問題が押し掛かっていたのです。また息子が通う神戸の学校でも、揉め事のようなことがありました。級友の母親たちが、私と離婚することがいかに彼女と息子のためによいかを並べ立て、妻を説得しようとしたのです。もちろん彼女はそんな言葉には動じませんでした。私たち家族を取り巻く状況が悪い方向へ向かっていることだけは確かでした。

しばらくすると、今度は私がドイツ領事館に呼び出されました。そこで私は、所持しているドイツのパスポートを見せるように言われました。パスポートには、人目をひくような大文字でユダヤ人を意味する「J」と「イスラエル」という名前を刻印されました。この年の夏、1939年でしたが、五週間か六週間の休暇をとって旅行をするつもりでした。アメリカへ行くためにパスポートがなくてはならなかったのですが、しかし私のパスポートには、この特殊なラベルがついていました。アメリカへ行くために、まずアメリカ領事館に赴き、滞在ビザを申請しなければなりません。ビザをとることはできましたが、それと引き換えにアメリカへの移民申請者のリ

ストから私の名前が削除されることになりました。旅行から戻ってきた後、また申請すればよいことでしたが。ただ私の名前は割当移民のリストの上位にあったのです。しかし当面の間、そのリストから除外されることになりました。ただ後からわかったのですが、このことでリストの順位が入れ替わったところで何も変わらず、どう転んでも順番がまわってくることはなかったのです。一ヶ月半にわたったこの旅行については、後ほどの話題にとっておきましょう。

1939年10月、アメリカ旅行から日本に帰ってきたのですが、我が家を取り巻く状況は一変しました。ひとつ面白い話を付け加えておきましょう。この年の10月11日、折しもボブの誕生日、私たち家族は日付変更線を通りました。そのために誕生日がなくなってしまったのです。かわいそうな息子は、誕生日なしで甘んじなければなりませんでした。もちろん、後で何らかのかたちでお祝いしましたけどね。

そうこうするうちに、とうとうヨーロッパでは戦争の火蓋が切って落とされました。ヒトラーがポーランドを侵略したのです。ヨーロッパの戦争は、日本にも飛び火することになりました。ラジオや新聞、映画などは、ヨーロッパの戦況に関する報道が大半となり、あらゆることが変わりはじめたのです。日本とアメリカを取り巻く政治状況も変わっていきました。米国はいわゆる「支那事変」に端を発する日本の侵略を非難し、中国から撤退させようとしていました。しかし日本は一向に引かず、アメリカとの関係は張り詰めたものとなりました。アメリカは強硬措置をとったために、日米間の貿易にビジネスも大打撃を受けたのです。品目によっては、関税率が大幅に上がったため、米国からの輸出が滞る品目もありました。私が扱っていたカーペットは特殊なもので、神戸のヴィンクラー商会とマリソン社の間で取引されていたのですが、高い関税が課せられたうえに、輸出の割当が制限されるようになったのです。私の商売はまともに煽りを受けることになりました。

日米間の外交関係にも暗雲が立ち込めていました。そのために日本の大使館や領事館からでは、米国への割当移民の申請ができなくなってしまったのです。どうなったかといえば、ワシントンへ申請書を出さなければならなかったのです。マリソン社の構成員にお願いして、新たに移民の申請をするほか手立てはなくなり、先方も同意してくれたのです。私たち家族が移民として入国したとしても、アメリカの公的扶助の対象とならないことを証明するため、マリソン氏自ら口供書を認めなければなりませんでした。彼にしてみれば面倒なことでしたが、それでも私たち家族が入国できるようにできる限りの手立てをとってくれました。すべての手続きが終わるやいなや、マリソン氏に謝意を伝えました。義理の兄がニューオーリンズにいたので、働きかけました。彼も口供書を認めてくれ、その口述書を国務省へ提出してくれました。

日本でも、特定の物資が出回らなくななど、中国との戦争の影響が影を落としていました。早くも1938年には、ガソリンの購入が制限されて、一定の割当量の配給を受けるというかたちになりました。親友のウォールラップ氏とともに、車で遠出をした時のことです。三日ほどかけて、

紀伊半島の緑豊かな片田舎をまわりました。素晴らしいことこの上ない旅行ではありましたが、道中でガソリンを切らさないようにと、後ろのトランクと座席の足元にもガソリンのタンクを積んでいたのです。結局、ガソリンを切らすことはありませんでしたが。トラックやバスは、燃料をガソリンから木ガスや木炭ガスに切り替えていたので、神戸を走るバス、トラックやタクシーに薪ストーブが備え付けられるようになりました。燃料不足のため、これらの改造型の乗り物は、起伏のある神戸の道なりを走るのが難しくなり、上り坂では徐行運転というのが常でした。

日中戦争以降、米国は鉄屑の輸出を制限するようになりましたが、もともと日本は輸入に依存していたので、大きな打撃を受けることになりました。中国における戦争遂行のみならず、おそらくは来るべき米国との戦争に備えていたためでしょう。日本の場合、廃品材料は輸入品が大半を占めていて、常時、何百万トンもの廃品材料が船積みで輸送されていたのです。徐々に輸送が滞るようになり、パールハーバーの奇襲による第二次世界大戦の開戦直前、米国は金属のスクラップの輸出を打ち切りました。これは日本の産業界に大打撃を与えることとなりました。

その他にも、私たちを取り巻く環境は変わっていきました。日本でもナチスが幅をきかせるようになったのです。私が勤務していたヴィンクラー商会は、私を解雇するか、できる限り勤務時間を減らすようにという圧力にさらされていました。ヴィンクラー商会は慎重にならざるをえず、会社が損害を受けないようにするためにも、私の勤務時間を最小限とし、なるべく出勤しないようにと言ってきたのです。その後、1941年12月の開戦の前、私はこの仕事から身を引くことになり、ヴィンクラー商会の構成員でもなくなっていました。

この頃、正確な日付はわかりませんが（おそらく1940年だったと思いますが）、ドイツ領事館に呼び出されました。そこでパスポートを提示すると、そのまま没収されてしまいました。追いつちをかけるように、もはやドイツ市民ではないという宣告を受けたのです。この時点で私は、いわば無国籍となったのでした。私の妻と息子はドイツ市民のままでしたので、彼女らには危害は及びませんでした。

主な参考文献

Herweg, Nikola / Pekar, Thomas / Spang, Christian W. (Hg.), *Heinz Altschul: As I record these memories...* “Erinnerungen eines deutschen Kaufmanns in Kobe (1926-29, 1934-46)”, Tokyo: OAG-Tokyo, 2014.

Lehmann, Jürgen, *100 Jahre Deutsche Schule Kobe 1909 bis 2009: Eine Chronik als vorläufige Geschichte dieser kleinen deutschen Schule in Japan*, München: Iudicium, 2009.

Müller, Wolfgang, *Amphibisches Leben: Aufwachsen in zwei Welten*, Tokyo: OAG-Tokyo, 2009.

中村綾乃「東アジア在留ドイツ人社会とナチズム」工藤章・田嶋信雄『日独関係史』全3巻（東京大学出版会、2008年）

中村綾乃『東京のハーケンクロイツ』（白水社、2009年）